

のではないかと考えられるが、いかがであらう。

註① 富貴原章信師論文「攝論宗の日本傳來に就て」〔大谷

學報〕第二十一卷第二號(六八頁)。

② 『群疑論』第六「九品生位章」(『淨全』六・八六頁上段九行)

に、「一釋此九品……麤分ニ九品也」と説き示される

文を、『遊心安樂道』(『淨全』六・一六頁上段七行)ではその

まま依用されている。

蓮師の後生の一大事について

山元良信

蓮師一代の發揮は「後生助け給へ」「後生の一大事」である
とせられ、今稻葉昌丸師編「蓮如上人遺文」並に「行事」によ
つて見れば第一に後生の語は今生に對して用いられ現世後世の
義であり今生のいのり即ち諸神諸佛に對する現世祈禱を排し後
生たる淨土往生をねがわしめておる。

第二に後生菩提の成語によつて「今度の極樂往生」の意味を
表し「後生のための念佛」「ねがうべきは後生」「後生は永生
の樂果」「後生は空しく無間地獄におつる」「われらがちから
にては後生のたすかるべきなし」「彌陀如來をたのみたてまつ
らんひとならでは後生はたすかるべからず」等、後生の苦樂は
如來をたのみかたのまぬかによつて決定する點を示される。

第三に「後生助け給へ」は善導の六字釋の南無歸命の二字の
解釋として彌陀をたのみころを念持の義によつて示され機法
一體の衆生往生の體が南無阿彌陀佛である事が示さる。

第四に「後生の一大事」は、今度の極樂往生の一大事の意で

あつて「後生善所の一大事」「今度の一大事」「今度の往生」

「今度の一大事の往生」「一大事の後生たすけたまえ」「一大

事と思ひとり」「今度の一大事の報土往生」等との成語によつ

て後生こそ一大事であつて我々が報土往生を遂げるか否かは佛

教上からも亦人間一生涯からも最も重要である事を警告せられ

たのである。

以上の如く蓮師時代の無常觀末法思想の深刻な時代に適合し
て、民衆の要望に答へたる時機相應の教化として「後生の一大
事」は意義があつた。

併し現代に於てはこの「後生の一大事」をいかに受取つて行
けば現代人の救いとなるであらうか。蓮師に於ては世俗諦の立
場よりして三世思想が説かれたのであるが、現代に於ては勝義
諦の立場から三世が説かれて現代人の救いとなるのではなから
うか。

部派佛教の上座部は、三世實有の思想で客觀的に三世法を眺
め、大衆部は法體恆有の思想が否定せられて過去未來は現在に
對する相對的名稱として現在法も亦一刹那にすぎぬのであつて
現在の一切法は主觀によつて統一されたもので客觀的にはあり
得ないとするが、更にこれを龍樹は「中論」觀去來品に於て一
層高められて勝義諦の立場に於て三世の自性は無自性であるか
ら不可得であるとして、三世の實有を否定しておる。かかる點
よりして現在法も觀念であり非實有であるが、今を境として主
觀的には前後が區別せられて過去未來が考へられる時「後生の
一大事」は今から後の死後に到る、「永遠の期間の救済の一大

事」であり、又過去にさかのばれば、久遠劫來の輪廻の自己の救済である。そして今正定住に到る現實の救済が報土往生の決定事項となつて来る。そこで眞實信心の獲得が現生不退であり金剛堅固の信心のさだまる時、彌陀の心光の攝護があり、生死がへだたり一念慶喜するのであるから「即得往生住不退轉」であり、^⑧「不退轉に往生する事」が重大關心事である。畢竟今の信の一念の信樂開發の時刻の極促が大切となり、しかも勝義諦の立場即ち緣起空性の立場から、信心さだまるときと、現生不退のときと、心先攝護のときの三者は同時であり、このときは法界等流の如來廻向の信心であつて見れば緣起空性としての實有でなくてはならない。

かくて現生不退に一念慶喜する人は後生は願力にまかせ凡夫の計いにあらざる事となつて来るのである。

註① 龍山章眞印度佛教概説九十一頁 ② 月稱註 梵文中論釋九十二頁、山口益譯 月稱造梵文中論釋一四〇頁

③ 唯心鈔文意第二章 ④ 末燈章十九章

越後から東國へ

——西念、善性、と宗祖——

寺 西 惠 然

宗祖の越後から東國、特に常總野に移られた頃の概地方を見ると、下野には宇都宮氏、常陸南部には宇都宮の支流八田氏、中部には多氣氏、又中部の北邊には笠間氏が勢力を得て、文化面にも功績をあげて居た。次に常陸西南に接する下總猿嶋郡に

は源氏の支流井上氏が其の力を現はして居た。かゝる環境の内へ宗祖が進出された。常陸の南は湖沼や大川があつて濕地が多く、それに沃野が連らなつて居た奥郡は山丘が多く肥田は少なく畑地が多かつた。其處には剛健な農民野人が住み武人が加はつて居たが宗祖の門侶は此の土地に著しく増大して居る。これは下總から常陸南部へそれから次第に奥郡へと展開し奥郡に至つて教團の門侶は最高潮に達した。次に下總の門侶について交各牒を検すると飯沼性信、新堤信樂、善性とあつて善性の下に智光、明性が出て明性の下註に「下總國之磯部住」とある。更に下總に接する武藏には太田住西念がある。武藏は源氏の勢力範圍で太田は『東鑑』寛喜二年正月荒野開發の記事の太田である。今この善性、西念の俗姓を勝願寺、西念寺の寺傳に調すると何れも源氏の井上氏である。『大日本史』^{二九卷}「尊卑分脈」に「源賴信子賴季居此稱井上氏。其族有米持高梨二氏」とある。次に古來廿四輩、舊蹟寺院には各々其の開基を紛飾莊嚴せん爲め系譜を故意に作製した形跡が多分にある。しかるにこの善性、西念については割合明確に記るされ^(善性は後世作製されたが)兩者とも井上氏である、磯部勝願寺では善性を井上九郎滿盛の長男光世とし次男忠世を明性として居る。西念は邊田西念寺傳に井上盛長の子次郎とし其父盛長は川中島に文治五年戦死し其の子次郎は母とともに信濃駒澤に移住し長じて母を失ひ越後に出て家出し西念を稱し武藏太田に移つて仕官したとある。同寺の元應三年の鐘銘に「下總國下幸島郡邊田郷」「奉加一向專修輩」の文字が見え更に「聖德寺」の寺號があるので西念寺は元、聖德寺と云つた事が判明する。西念は宗祖門侶中最年長者で正應